

黒の教室

緒莉
画:水島☆多也



黒の教室



著：緒莉

画：水島☆多也
原作：BISHOP

CB オトナ文庫



プロローグ 学園長は牝奴隷

「あなたは何をやっているんですの!」
 明蘭女子園の職員室に、よく通る鋭い聲が響き渡る。
 「しっかりと気を引き締めておけば、そのようなケアレスミスなど発生しません! たるんでいる証拠です!」
 「も、申し訳ありません、学園長!」
 叱り飛ばされて身を縮めている女教師は、学園長と呼ばれた女より一回りは年輩だ、にもかかわらずかか小サストの横点ミスでこまで責められてしまつては気の毒だ、とこの学園でただ一人の男である体育教師、上原大輔は苦笑いした。
 助け船を出してやろうと、推している二人に近付いていく。学園長である有栖川冴香の機嫌がこまで悪いのは、おそらく自分のせいだからだ。
 「学園長、そのくらいにしておきますか?」
 「あら、上原先生ではないですか。ずいぶんと久しぶりにお家を見た気がしますわ」
 「遅れて申し訳ありません。少々授業が長引いてしまいました!」



SAEKA ARISUGAWA
有栖川 冴香
 明蘭女子園の若き学園長。気が強くプライドも高い。大輔に調教された過去を持ち、絶対服従している。

DAISUKE UCHAKA
上原 大輔
 明蘭女子園で、唯一の男性職員として働く体育教師。女子校生を調教し、若い女性を食うことが生き甲斐。

目次

プロローグ	学園長は牝奴隷	005
第一章	穢された恋心	016
第二章	お嬢様、屈辱の母乳搾り	080
第三章	恥辱の授業はサーメン味	142
第四章	二人の奴隷宣言	200
エピローグ	特別授業は公開調教	241

登場人物



MAHIRU NARUKAWA **鳴川 まひる**
 優秀な成績を誇る新体操選手で、学園には大志三ツの特生として入学した。快活な性格で、いつも周りに友人が集まってくるムードメーカー。



KAZUHA KUSUNOKI **楠木 和葉**
 大手製薬会社の社長を父に持つ品行方正なお嬢様。乳肉への性的快楽に反応して肉欲を喚びだす特殊体質の持ち主で、自分の乳肉にコンプレックスを持っている。



YUME KOMINAMI **小南 結芽**
 物静かで、いつも水を含んでいる孤僻な少女。学力は超が付くほど優秀。大輔もトップの成績を収めている。その反面、運動は大の苦手と体力もない。



NANAKO NOMIYA **野宮 菜々子**
 大輔が学生時代、近所だったよしみで家庭教師に就いていた少女。その縁で子どものころから大輔を慕っており、今でも好意を丸出しにして接してくる。

皮肉な挨拶に、大輔は深々と頭を下げて謝罪した。身体みに話があると、冴香に言われていたからだ。

「言い訳は学園寮室で聞きます」

「すみません、上原先生、私がミスをしたのに、先生に手先が向いてしまったみたいで……」

「叱られていた教師が声をかけてきたが、笑顔で首を横に振ってやる」

「気にしないでください。俺が約束に遅れてしまったのは事実です」

「上原先生！ この上まで私を待たせる気ですか？」

「ああ、すみません、今行きます」

心配そうにこちらを見ている同僚達に頭を下げて、大輔は冴香の後を追った。

「さて、有栖川学園長」

学園長室に入るなり、大輔の表情は一変した。善良な教師の仮面を脱ぎ去り、目をきらきらさせて背後から冴香の巨乳を驚愕気にする

「はあ……！ そんな、いきなり、強……」

冴香が胸を握った。甘く媚びた声は、ついさっき女教師を怒鳴り付けていた時とはまるで別人のようだ。

「遅れた詫言、学園長様はすいぶんと立腹だったようだから」

「意地悪く耳元で囁きつつ、むちりと中身の詰まった乳肉に指先を突き立てる」

「んあッ！ そんなに爪を立てては……お、お首しくさない、主人様」

「ヒロの教師にすぎない大輔に、この学園で逆らうものなどないはずの学園長がこんなふうにも首を割るなど、誰が想像できるだろう」

「先ほどの無礼は申し訳ありません……！ 学園長として、他の教師の前では厳格な態度で接しなければならなかったのです」

「言い訳を聞くつもりはないぞ」

職員室でお返しとばかりに、大輔は量感たっぷりの膨らみを形がひしゃげるのも構わずに力一杯揉みこめた。

「はうらッ！ ああ、指、すこい……おっぱいにグニグニ食い込んでんじやうっ！」

「そら、声が甘くなつてきてるぞ、こうしておっぱいが潰れるくらい強くされるのがいいんだらう」

「は、はい……！ 敬愛するご主人様の手でおっぱい絞めていただいて、幸せです」

この愛嬌め、職員室にいる連中が学のお前を見たらびっくり返るだろうな

「んはあッ……み、見られてしまうのも、いいかもしれません……」

冴香の目が妖しく光った。

「学生の頃、授業中にしていたように人前で連するの、たまになく興奮してしまいますから」

お嬢様で、学生時代から続けた大輔の忠実な奴隷だった。

どと息巻いて毎度毎度威嚇く構えてきた、しかしパイプを埋め込んだ状態で授業を受けて、そのまま失禁させるようなハードな調教を繰り返すうちに、結局は肉の快楽に屈して、今に至る。

冴香だけでなく、他にも数多くの女を大輔は調教してきた。冴香はその中でも極上の奴隷だ。顔も体も反動も素晴らしい、そのうえ名家の出で金と権力があり、本人自身も女学園の学園長という地位を持つている。あまりに便利で役に立つものだから、何年も側に置いてやっていた。

「まったく、たいした奴隷学園長さん、お前は」

「ブラジャーをひん剥き、生乳を露わにする、いつ見てもどくどくやらしい胸だ、服の中から飛び出した乳房は、強く握られ続けられたと冴香自身の興奮のため、わずかな赤みを帯び、火照っていた。膨らみの頂点では、薄紅色の乳首が艶やかに色づいている」

「ご主人様のご希望通りに教科担任を入れ替えても……」

「……んふっ、女、何も問題はありませんかあ……？」

「ああ、大丈夫だ、急な変更だったからちょっとした混乱はあったが、すぐに『そういうもの』だと受け入れられた」

「ついでに……」

「おかげで、獲物として目を付けた学生に近づきやすくなった。これまでお願立てをしてくれたことには素直に感謝するぞ、よくやってくれたな」

言葉だけではない謝意を伝えるため、大輔は冴香の乳房を平ニツと強く握り締めた。まるでできたてのプリンのように、肉実がさらさらと弾む。

「はあッ！ あ、ありがたきお言葉ですわあ」

「大輔は去年まで、明倫女学園とは別の学校で教師をしていた」

「ご主人様のための習字場を作りましたが、まさか自分が喜ばせるために、学園一つ丸ごと作り替えてしまうとは……」

「そういうのは、何が話があったんじやないのか？」

「指に力を入れた分だけ、弾けるような手触りと共に自在に形を変えていく膨らみを、ぐにゅぐにゅと遠慮なくこねる。豊かな弾力の奥にはコリッとした乳腺の感触が潜んでおり、

冴香の目が妖しく光った。

「学生の頃、授業中にしていたように人前で連するの、たまになく興奮してしまいますから」

お嬢様で、学生時代から続けた大輔の忠実な奴隷だった。

どと息巻いて毎度毎度威嚇く構えてきた、しかしパイプを埋め込んだ状態で授業を受けて、そのまま失禁させるようなハードな調教を繰り返すうちに、結局は肉の快楽に屈して、今に至る。

冴香だけでなく、他にも数多くの女を大輔は調教してきた。冴香はその中でも極上の奴隷だ。顔も体も反動も素晴らしい、そのうえ名家の出で金と権力があり、本人自身も女学園の学園長という地位を持つている。あまりに便利で役に立つものだから、何年も側に置いてやっていた。

「まったく、たいした奴隷学園長さん、お前は」

「ブラジャーをひん剥き、生乳を露わにする、いつ見てもどくどくやらしい胸だ、服の中から飛び出した乳房は、強く握られ続けられたと冴香自身の興奮のため、わずかな赤みを帯び、火照っていた。膨らみの頂点では、薄紅色の乳首が艶やかに色づいている」

「ご主人様のご希望通りに教科担任を入れ替えても……」

「……んふっ、女、何も問題はありませんかあ……？」

「ああ、大丈夫だ、急な変更だったからちょっとした混乱はあったが、すぐに『そういうもの』だと受け入れられた」

「ついでに……」

「おかげで、獲物として目を付けた学生に近づきやすくなった。これまでお願立てをしてくれたことには素直に感謝するぞ、よくやってくれたな」

言葉だけではない謝意を伝えるため、大輔は冴香の乳房を平ニツと強く握り締めた。まるでできたてのプリンのように、肉実がさらさらと弾む。

「はあッ！ あ、ありがたきお言葉ですわあ」

「大輔は去年まで、明倫女学園とは別の学校で教師をしていた」

「ご主人様のための習字場を作りましたが、まさか自分が喜ばせるために、学園一つ丸ごと作り替えてしまうとは……」

「そういうのは、何が話があったんじやないのか？」

「指に力を入れた分だけ、弾けるような手触りと共に自在に形を変えていく膨らみを、ぐにゅぐにゅと遠慮なくこねる。豊かな弾力の奥にはコリッとした乳腺の感触が潜んでおり、

そこを軽く押し潰すように握ってやると冴香の背筋が極ましく震え、呼吸も死を増した。
 「あつ、あんな！ それ、私の感じる様み方……んはああ、ゾクゾクしちゃう」
 「こら、喘いでばかりないで、ちゃんと用件を話せ」
 「はっ、はい……あの、ご主人様のお耳に入れておいていただきたいことがありまして……
 ……楠木和葉には、お気を付けてくださいませ」
 それは、大輔が担任をしているクラスの学生の名だった。父親は国内有数の大手製薬会社、
 楠木製薬の社長というお嬢様だ。
 「このところ、下校がかなり遅い時間になっているようです」
 「服泳部の試合が近いとか？」
 「それが、たびたび部活を休んでいるという噂も一緒に聞かされてきて……これが普通
 の学生であれば本人に注意をすれば済む話ですけど、彼女の場合はそうではありませんか
 ら」
 「楠木の家の中が不審に思うところか」
 大輔は、学生も職員も女だけだった学園に突如現れた男だ。転職してくることが決まっ
 た時、楠木家の人間は大輔の身元や経歴について学園長である冴香にずいぶん質問をぶ
 つけてきていたらしい。
 「この学園の周辺を、見慣れない人間が数人うろついている、という話も聞いていますわ



……あんな」
 「人を雇って調査しているところか……ふん、上流階級の親御さんは、娘に変な出が
 付かないか心配でしょうがないようだな」
 「んふっ、気の毒なお話ですわね。その大事な娘は、もうすでにご主人様に狙われてしま
 っているのですから」
 「クラ、まったくだな」
 そう、楠木和葉は、大輔が養物として定めた少女なのだ。しかも、担任を受け持ったク
 ラスに所属しているから、実に手を出しやすい。
 「私の方から、怪しまれない程度に差控してみますが、あまり効果は見られませんが、
 今後何か手は打ってみるつもりですが、ご主人様も、警備だけはしておいていただきた
 いのです」
 「わかった。気を付けておこう」
 親に出しやばられて計画が破綻するなんてごめん。大輔は冴香の言う通り、周囲に注
 意を払っておくことにした。
 「よく知らせてくれたな。有益な話だったぞ」
 「んはあ……お褒めにあずかり光栄ですわ」
 「褒美をくれてやる。受け取れ」

そう言うなり、大輔は両の乳首を握り込んで、思い切り引っ張った。
 「んひゃあああんなッ！」
 甲高い悲鳴を上げて、冴香はビクンッと背中を震わせた。
 「ひいん!! 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！ 乳首ッ！
 ぐにぐに指を握り合わせ、まらかさの中にわずかに張り詰められた感の熱を染しむ。
 先ほどまで薄い色だった乳首は充満して赤くなり、ぶつくりと膨らんでくる。
 「ほら、よく味わえ。このスケベ乳首で、乳の喜びを味わってやつをたっぷりだな」
 「むひいんッ！ 乳首ッ、クリクリしながら乳首をすするッ、んあッ、これッ、感じ
 ますッ」
 乳首をさらに捻ると、冴香の音がより大きく、艶やかになった。まるで嬌声のポリエー
 ムをいじるツミミのようだ。
 「はひいっ、ひんッ、ご褒美嬉しいですッ、んあッ、ご主人様、私の乳首、嬉しくて
 勃起止まらないのッ」
 犬のように舌を出して、はあはあと荒い息をついている冴香は、まさに牝犬そのものだ。
 胸への刺さりだけでもうあでこはくし濡れらしく、甘酸っぱいような女の匂いが立ち上っ
 てきているのがわかる。
 「昼休みがもうすぐ終わるな……」
 「一気にイッちまえッ」

發育がいいのは胸だけじゃない。大きなカーブを描く尻をはじめとして、全身の肉付きがよく、むっちりとしていて実に美味そうだ。

「ねっつりした目で和菜を覗察している。ふと目が合った。少々バツが悪いが、ここで目を逸らしたり逃げたりしてはかえって怪しいだろう。」

「楠木、ちよつと来てくれるか？」

「大輔は掌々と和菜の名前を呼んで、手招きした。」

「何かしら、という感じで軽く首を傾げて、和菜がやや駆け足でこちらにやってくる。二つの胸がたゆんだゆんゆんと弾み、大輔の目を惹き寄せた。」

「すまないな、部活中に。」

「いえ、何かご用でしょうか？」

「大輔を見上げてくる和菜の瞳に、怪しむような気配はまったくなくない。すっかり大輔を信頼している顔だ。」

「楠木が最近、遅くまで学園に残っていると聞いて気になってな。毎日のように下校時刻を過ぎてから学園を出ているようだが……どうした。何か事情があるのか？」

「大輔は汗ばみながら聞いたことをそのまま直球で和菜に投げ付けた。担任教師としては、なんらおかしいことではないはずだ。」

「……すみません、心配おかけしてしまって。」



「和菜は申し訳なきように頭を下げた。」

「実はこのところ、頼まれごとが重なってしまって。」

「頼まれごと？」

「はい……昨日は園芸部の方が、夏の花々の手入れ方を教えてくれたかと言ってきた。昨日は、本場での調理経験があるということで、演習部のみなさんにお稽古を見て感想を聞かせて欲しいと言われました。料理研究会は、イタリヤ料理のレシピを教える欲しいと……」

「すこいな、あちこちの部活から引つ張りだごじやないか？」

「他にも、下級生の皆さんからは勉強を教えて欲しいとお願ひされまして、私でお役に立てるならと、つい欲張ってしまいました。」

「担任として二ヶ月ほど見てきたからわかるのだが、和菜は人の役に立つのを生き甲斐としていそうな顔があった。」

「なんでもそんなに人助けが好きなんだか……もちろんいいことではあるんだが、楠木ほどになると、ちよつと不思議だぞ。」

「そうでしょうか？ 私はまだ、皆さんにも幸せになつて欲しいと思つているだけなんですけど。」

「皆さんにも、か。つまり、楠木自身は、今幸せなんだな。」

「はい、自分で言うのは厚かましいかもしれませんが、私は自分が恵まれて育つた人間だと、常々思っていますので。」

「それはまったくその通りだろうな。」

「和菜は生まれつきの器用な、家柄がいいのはもちろん、容姿だって恵まれているし、本人の努力もあるとしても、成績も運動能力も高い。」

「ですから私も、自分が与えられた幸せを他の人にも分けてあげたいんです。そのために、私にできることなら何でもしようと思つて、いたのですが……さすがに引き受け過ぎてしまったようで、自分の時間が取れなくなつてきてしまいました。こうして部活に参加するのは、実は一週間ぶりなんです。」

「おいおい、そいつは自分のことを顧みなさ過ぎだろう。それじゃ体がなまっちゃう。」

「そうなんです……たださええ全然遅く泳げないのに、練習不足で……何とか遅れを取り戻したいんですけど、先生は大会レギュラーの練習を見るのに忙しいので。」

「これは僕も、と大輔は胸時に計算した。」

「だつたら、俺がコーチしてやろうか？」

「え？ 先生がですか？」

「これでも体育教師の端くれだからな。泳ぎ方を教えるくらいならできさぞ。」

「でも、先生の迷惑になるのでは……」

「楠木は、誰かのために何かする時、迷惑だと思つてやめてやるのか？」

「いえ、そんな」

「俺だつて同じだ。教え子の役に立てるなら、喜んでやるさ」

「先生……」

「爽やかに笑つて見せると、和葉は表情をほころばせた。

「ありがとうございませう。では、ぜひお願いいたします」

「その時、休憩の終わりを告げるホイッスルが鳴った。

「この件については、また明日にでもゆつくり話そう。あ、他の子には内緒で頼むな。ひきだなんだと言われては面倒だからな」

「はい、わかりました」

「べこりと頭を下げてから、急ぎ足で部員達の元へ戻つていく和葉。そのぶりぶりとも揺れる尻を見つめながら、大輔は口の端だけでニヤリと笑つた。

◇ ◇ ◇

「せいんせい」

「せいんせい」

授業を終えて廊下に出るなり、大輔は後ろから声をかけられた。振り返ると、そこには一人の少女が立っていた。

「ん？ ああ、菜々——野宮か」

「わざわざ言い直さなくてもいいのに『菜々子』でいいよ、誰も聞いてないんだかと」

「そういうわけにもいかならう。目頃から意識しておかないと、ふとした時に下の名前で呼ぶことになるんだよ」

野宮菜々子は、この学園に転職してくる前からの知り合いだ。実家が隣近所だったよしみで、大輔は学生時代、また子供だった菜々子の家庭教師をしていたことがあった。そのため他の学生よりも心理的な距離が近く、油断するとすぐに気安く接してしまいがちになる。

大輔は学園で唯一の男というだけで、ただでさえ目立つ存在だ。菜々子一人だけ下の名前前で呼ぶような真似をしたら、周りからどう噂されるかわかたもんじゃない。しかし菜々子は、大輔の態度がよそよそしいと不満らしい。

「先生に名字で呼ばれると、何だか距離を置かれて、いるみたいで、ちよつと煩しいんだけど」

「彼の教え子になった以上は仕方ないだろ。諦めてくれ」

「それはわかってますけど」

わかつてますと言いつながら、菜々子は不服そうに唇を失せている。そんな顔をしていると、まだ子供みたいだ。

「近所のしがらみで菜々子の家庭教師を引き受けた時、大輔は正直どこか面倒だと思つた。しかし菜々子は聞き分けがよく手が掛からなかったし、素直に懐いてくるものだから存外楽しく過ごすことができた。菜々子にとっては、よお兄さんの家庭教師だったと大輔は思つていて、その裏では、自分の通つていた学園で青春を過ごした記憶が蘇り、それが、

「そうやって若い頃から顔を使ひ分けていた経験は、女を犯し、調教するため教職に就いた今、非常に役に立っている」

「おーい！ せんせいっ！」

「ん？」

「また誰かに呼ばれた、と大輔が何の気なしに振り返ると、

「おお!! やばっ、とまんな」

「ドオオオオオッ!!」

「何が勢いよく背中につかつてきて、大輔は転びそうになったが、何とか踏みとま

つた。軽くむせてしまい、菜々子が背中をさすつてくる。

「先生、大丈夫ですか」

「げほっ、ああ、大丈夫だが……」

「あ、ほんと？ やー、それはよかつたよかつた」

「悪いはずに言つたのは、新体操部に所属している期間まひるだ。明るく活発な少女で、いつも大勢の友達に囲まれているのはいが、少々活発過ぎるのが難点だった」

「やばは、ごめん先生、思つたよりスピード乗っちゃつて止まらなかったさ」

「陛下を全力疾走するなど、何度言はわかつてくれるんだお前は……」

「反省してるし、お説教もちゃんと聞くと、でも、まずはあたしの話を聞いてくれないかな」

「話だど？」

「先生、今暇だよな？ フリーだよな？ 何も用事入つてないよな？」

「お、お……」

「勢いよく追られ、大輔は思わず一歩下がってしまった。

「今日ウチの部の顧問の晴山先生が、風邪で休んじやつてて、このままじゃ部活ができなくて、困るんだよお！ だから先生、代理で監督して！ 一生のお願い！」

「……まあよかった。そういう事情なら引き受けてやる、今日だけな」